

毎年、他の学校や研究団体の先生の授業を参観し、指導助言を行う機会がある。そのほとんどは面識のない先生である。初めてお会いし、その方の授業を拝見して、ああだこうだと言うのである。よく考えてみると、非常に難しい役目である。

自分の学校の先生であれば、授業を見る機会は何度もある。いつでも話すことができる。一回限りの場合とは、自ずと接し方は違って来る。授業が改善してくれば、そのことを具体的に認めることができる。何度か授業を参観して、その先生のすばらしさを伝えることもできる。

他校の先生の場合は、こうはいかない。1回の授業を見てアドバイスを送る。その先生のことがよくわからないままに、限られた時間の中で、授業改善に向けて伝えるべきことを話す。聞いている方は、すべてをメモできるわけではない。限られた時間では話せる内容も限定される。そこで、配布資料を準備して臨む。資料が残っていれば、後で見返してくれるかもしれない。

こちらに問われるのは、「翻訳力」である。当たり前のことを当たり前と言うのは、そう難しくはない。むずかしいことをむずかしく言うのはできる。だが、これでは相手には伝わらない。理解してもらえない。「よし、やってみよう」とはならない。その人に合うように、その場にいる先生方に伝わるように、むずかしいことをやさしく、やさしいことを深く伝えなければならない。これが容易ではない。話したいことを自分が本当に理解していなければ翻訳はできない。

何度も指導助言を行っているが、うまくいったなどと思ったことは一度もない。毎回、終わった直後に、会場を後にするとき、職場に戻ってから、家に帰ってからと、ずっと落ち込んでいる。ああ言えばよかった、あれを言い忘れた。また早口になってしまった。反省しきりである。

先月、ある小学校に行った。いつものごとく事前に資料を作成した。なぜだかわからないが、今までよりも力が抜ける感覚があった。毎回、あれも伝えたい、これも伝えたいと思ってしまうのだが、このときは程よく収めることができた。実際、指導助言を行ってみたところ、いつもよりは余裕があり、いつもよりは早口にならずに済んだ。当たり前のことだが、伝えるべきことは絞った方がよい。

他校での指導助言は、「一期一会」である。一生に一度の出会いであり、二度とないと思うと、詰め込み気味になる。一期一会は、茶道に由来している。茶会は一生成のものとして心得て誠意を尽くし臨むべきであるという考えからきている。

一度限りだから誠意を尽くすのは指導助言でも同じである。問題は、その人の心に灯をともしることができるかである。少なくとも、何かしらのきっかけにはなってほしい。授業者に対しては、話し合いの中で様々な意見が出される。しかし、指導助言者に対してはどうであろう。本人に、その評価が届くことはまずない。

もし、次の年も同じ学校や団体に呼ばれたら、それはいい評価だったということだろう。あの人にもう一度来てもらいたいということであろう。そうなれるように、一期一会のつもりで限られた時間の指導助言に向き合っていきたい。